

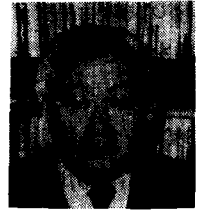
## 3つの偶然，3つの必然

——日本学術会議会長就任の弁——

日本OR学会近藤次郎会長が去る7月22日日本学術会議会長に選ばれ就任されました。学術会議に経営工学研究連絡委員会として参加することを認められるという宿願をはたすと同時に、わが会長が学術会議会長に選ばれるということは、OR学会会員にとっても大変よろこばしいことです。まずは就任の弁をうかがいました（編集委員会）

とかく人の世の出来事は偶然によっているものが多いが、しかしよく考えてみるとそれにはそれだけの理由がつけられるものである。私は日本オペレーションズ・リサーチ学会 日本品質管理学会、日本経営工学会および日本開発工学会によって推薦され、7月22日学術会議の会員となった。午前中には首相官邸で中曽根総理大臣による辞令伝達式があり、午後は会長等の選挙が行なわれた。このたび学術会議会員に選ばれたのは210名、そのうち私たちの所属する5部（工学）は33名である。そもそも日本学術会議の中に経営工学という新しい研連（研究連絡委員会）を設置したのは、きわめてむずかしい事業であった。学術会議の研究分野は設立された昭和23年当時の大学の学部、学科をもとに決められていたから、戦後廃止された航空学や、その後創設された経営工学、原子力工学などは入っていなかった。学問の発展にもなっていない研究分野が続々と拡がったが、経営工学研連が認められたのは今回の法改正にもなっていない5部の定員が3名増加したためである。いずれにしてもきわめて困難なことであった。第2には私のごとき者が経営工学の代表として、四学会から推薦されたことである。OR学会だけでなく各学会とも業績の多い学者、一流の研究者がきわめて多数おられるのに、私が選ばれたのはまったくの偶然といわざるをえない。そして最後は22日の臨時総会で210名の会員による何回かの投票の後に過半数の支持を得ることができたことである。これらはすべて偶然であって、その困難さを考え

### 近藤 次郎



てみると上記の3条件はいずれも確率100分の1程度とみることができる。したがって最終的に私が会長に選ばれる確率は乗法定理によって100万分の1ということになる。しかしながらよく考えてみると、このようなきわめて実現性の低いことが現実には生じたのは、学会の諸先輩たちが長年にわたって学術会議に足がかりを求める努力を積んでこられたためであり、またOR学会の会員が大勢の優秀な方々の中から私を選択してくださったことである。それにしても、第3に述べた私が選ばれた理由は、必然性をはなはだ少ないと考えられるが、しいて理屈づけをするならば会員の8割までが新人であり、従来学術会議で活躍された人よりも、この際新しい人を選ぼうという空気がみなぎっていたためでもあったであろうか。会員の中には文学、法律学、経済学、理学、工学、農学、医・薬学の各分野では世界的な業績を得られた学者ばかりがそろっているが、私が現在環境科学というやや他分野にもまたがる研究を行っていたためともいうことができるかもしれない。いずれにしてもこのような大役を引き受けることになり、はなはだ光栄と思っていると同時に、少しでも皆様のご期待にそいたいと考えている。このたびは選挙制度が変わり、学術諸団体を母体として会員が推薦によって選ばれてきた。このことは学術会議では、日本の科学者のすべての力を体系的に結集することができることを意味している。われわれはこれからは日本の学術の代表機関にふさわしい活動をしたいものと考えている。

会長に就任してまだ数日しか経ってはいないのに、学会員の大勢の方々から心温まるご祝辞や力強い励ましのお言葉を賜わり感謝しております。どうか今後もご支援の程お願い申し上げます。